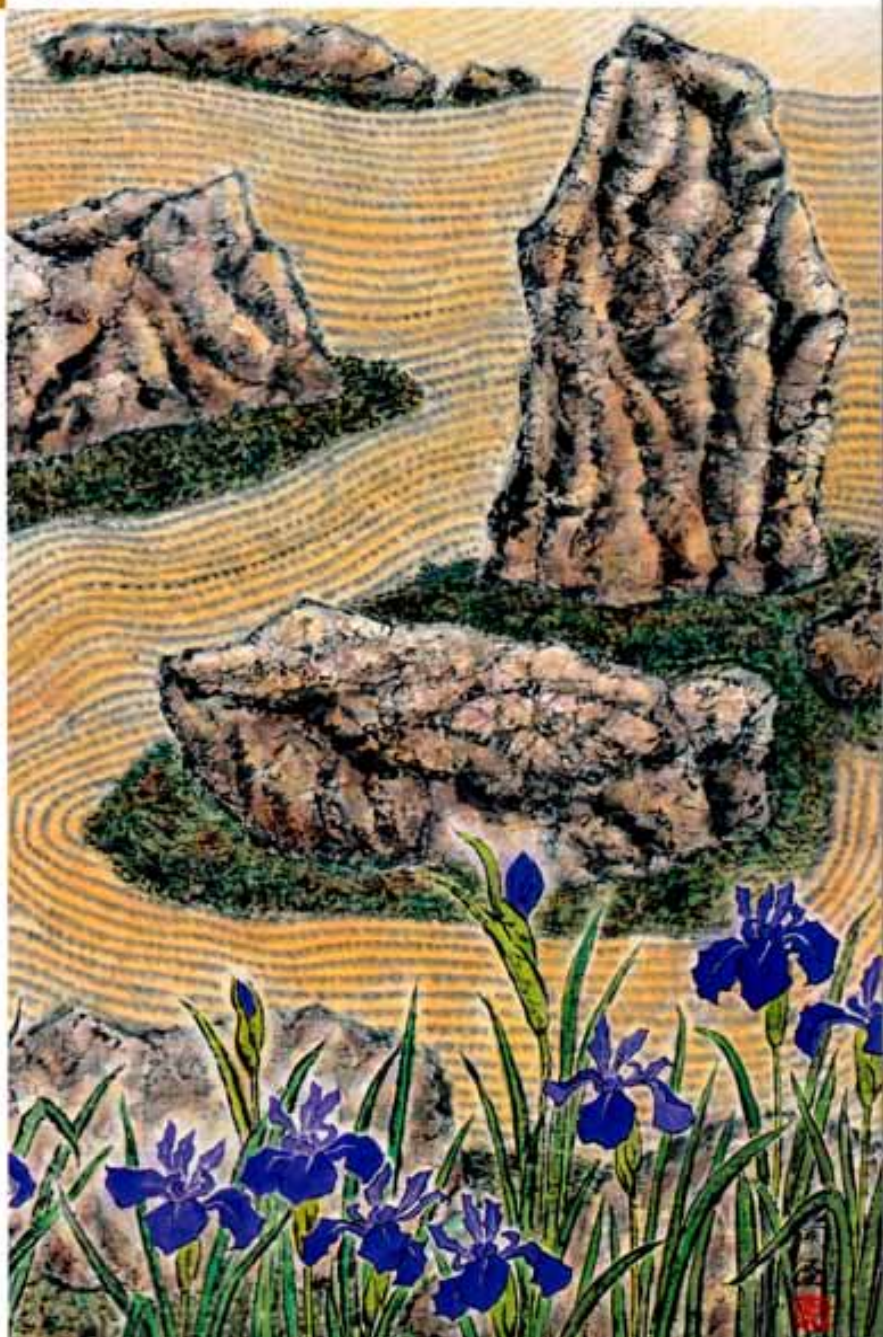


# 沖

# 9

2021

創刊雜誌[沖]



極

彩

能村 研三

登四郎・研三展

登四郎の生誕一〇〇年、没後二〇年を記念して市川市文学ミュージアムで「俳人能村登四郎と能村研三展」を開催している。通常展示エリアでの開催であるが、会期は来年の一月二十七日と長く展示期間があることもうれしいことだ。

十年前「文学ミュージアム」の前身の「市川市文学プラザ」であった時に、生誕一〇〇年を記念して「能村登四郎―その水脈―」と題した展示を行ったので、今回の展示は十年ぶりということになる。

また、十月からは特別展示室において文学ミュージアムの企画展で文学ミュージアムの収蔵する、永井荷風、井上ひさし、宗左近などの市川ゆかりの作家の展示も行われる。

今回の展示に合わせて「火の系譜」という図録が作られた。十六頁という簡単な図録だが、今回は私の関係する頁もいたいた。

今回の図録には「市川が育んだ俳人」というサブタイトルがつけられているので、記念講演では「俳句における定任意識」と題して、登四郎が昭和十三年から亡くなる平成十三年までの六十五年間暮らした市川へ

極彩のハザードマップ土用の芽

一書抜き十書が傾ぐ梅雨の書架

堰口に鷺の漁り喜雨の中

終奏のシンバル一打送梅雨

襟挟むハンカチ白き奏者かな

てつぺんに掉尾の一花立葵

古書店の高き梯子へ祭笛

屋号もて声を掛け合ひ山車を組む

操舵手の日焼の腕の交差せり

夕刊のコラムより読む端居かな

の思いと、私が昭和二十四叩に生まれ現布までの七十二年間についてお話ししようと思ってる。

東京をふるさともち春惜しむ

登四郎

臙濃し一生一郷棲まひかも

研三

登四郎は昭和十三年に市川中学に赴任した時から市川での生活が始まり、ちょうどその年から「馬酔木」への投句を始めている。昭和二十三年からの句が収められている第一句集『咀嚼音』には、教員時代の句と家族を詠んだいわゆる境涯句が収められているので、いずれも市川が舞台となった句が多い。

しかし登四郎は六十五年間を市川で暮らしながらも、東京をふるさととする考え方は揺らぐことがなかった。

私は市川で生まれてから、他郷を知ることなくここまで一郷である市川で過ごし、おそらくこれからも市川で暮らすことになるだろう。

登四郎と同じように仕事場が市川であったことも、市川への思いを強くしていったのだろう。

能村 研三

父母なくて土蔵残れる帰省かな  
 帰省子のまづ大の字の青畳

奈落出て黒子に汗の滴れり

日盛の列に釣られて列につく

山の子に潮騒届く貝風鈴

告白の日なり白靴選びをり

吾知らぬ焦土の匂ひ夾竹桃

また蝸の季節がやって来た。夕刻に鳴くその声は、一日の疲れを癒し穏やかな気持ちにしてくれる。登四郎先生の句集『幻山水』の「肥後五家荘」の項に、〈奥肥後に死ぬ蝸か声うるむ〉〈蝸や球磨も奥なる岩梯子〉〈人吉の灯窓ひ蝸降るばかり〉と、蝸の句が三句も載っている。どの地名も山国を思わせるが、峽の深さには蝸の音色がよく響くのであろう。

もう古い話であるが、田舎の無人の我が家に帰ったことがあった。さすがに物音ひとつしない家は寂しいもので、庭の樹木を眺めていると、〈秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる〉という歌が浮かんでくる。そんな時に折しも蝸が鳴き始めた。しばらく聴いているとその音色は、夕方の餞色に染まった十数戸の小さな村を、かなかなと鳴る数珠で巻き込むかのように聞こえ、大げさに言えばこは浄土かと思えるのであった。

もう一度先生の句に戻れば、先生は日本の田舎の素朴な暮らしを愛しつつ、その未来を見据えた上で、滅びの美を詠んだのではなからうかと思う。

蒼茫集

うすもの

小野寿子

\* 手を通してこころ通して羅をまとふ  
 うすものや子にふくませし乳房あり  
 うすもののごとに風入る身八つ口  
 帯あげも帯紐とても夏らしく  
 祖母の忌の五十回修す羅の黒し  
 いきいきと風を捉ふや羅の袂

大円上

辻美奈子

\* 子午線の大円上にゐて涼し  
 濡れてをる赤子の睫毛合歡の花  
 あつぱつぱ昨日と同じことを言ふ  
 マリリン・モンロー百合咲いてたわわなる  
 掴みけりパセリの森のひと束ね  
 送り火のをはりうつとり脈打てり

聖火ゆく

高橋あさの

\* 萍に水より強き日の匂ひ  
立葵ひとごゑ欲しき旧街道  
一望の青田素直な風となり  
いくばくの乱心雨後のまくなぎは  
蔵店は老舗のくらみ涼しかり  
聖火ゆく梅雨の蔵街たかぶれり

錘の柳

頓所友枝

青田風古墳に残る炭化米  
蕾解く心ひとつに花菖蒲  
白南風や言の葉すがし童歌  
梅雨に入る残量見えぬ乾電池  
山梔子や錆ゆく膝のこきと鳴り  
\* 水中花錘の柳を誰も持ち

炎火のポスト

千田百里

祭来る東をとこの大きな手  
石蹴りの輪のある地べた青嵐  
水族館出づるや梅雨の底およぐ  
\* 恋も句も受け炎天のポストなり  
道産子の夫の老いたり夏火鉢  
夏の街揺らし取的さんが行く

刃物屋

宮内とし子

\* 刃物屋の飾りは刃物青葉冷  
一枚の空のキャンパス揚花火  
夏野ゆく天つく宇宙電波塔  
凌霄花風のまつはる遊び蔓  
一木の仏に手斧風薫る  
大花火果てて濁世の闇の中

# 潮鳴集

父の日 石田 静

父の日や身体髪膚てふ遺産  
蟬時雨やんで寂しき風のあり  
\* 日直の名前置き去り夏休み  
骸骨の黒いTシャツ街薄暑  
ナイターの捕手のマスクの横つ飛び

鎖場 兵藤 恵

\* オルガンの雲踏むペダル梅雨に入る  
近づけば淋しきめだか発光す  
鎖場へ挑んでゐたる夏帽子  
短夜やホテルの裏のランドリー  
干草の香やコーヒーの封を切る

千羽鶴 関根 揺華

卯の花腐し折目をしかと千羽鶴  
\* 感情線濡らし白桃啜りけり  
夫といふ相棒のみて水羊羹  
一切の音の失せたる夕立かな  
短夜のまた読み返す師の句集

鮮魚店 川高郷之助

古城かな木々に千古の緑さし  
\* 水打つてをり廃業の鮮魚店  
現役のころの夏シャツ並べて地味  
梅雨寒や朝より灯す文机  
白シャツの正論過ぎて近寄れず

梅雨深し 篠藤 千佳子

薔薇園の外より垣間見ゆる薔薇  
\* 徒歩圏に消えたる本屋梅雨深し  
緑雨来て緑雨を帰るスクーター  
仮止めの養生テープ明易し  
灯台の見ゆる坂道青嵐

蚕豆 村上 葉子

青水無月夢に重さのありにけり  
\* 臆病な蚕豆ぐいと押し出せり  
一本の薔薇の重みを渡さるる  
無限なる蜘蛛の遺伝子糸光る  
絵手紙のでで虫あらら這ひ出せり

夜の雨 栗城 静子

青田よりさざ波空へひろごりぬ  
手際よきワクチン接種みどりさす  
\* 生きるとは少し流され水馬  
栗の花こぼればはじめの夜の雨  
ひたと来て声に火のつく油蟬

水羊羹 森村 江風

\* 水羊羹をとこ弱音の見え隠れ  
微匂ふ記憶の襷にある湿り  
潮騒を半音上げて梅雨明くる  
アンニユイをプールサイドに放る午後  
夕焼を白き卓布へ招き入れ

月 桃 藤代 康明

\* 石庭に奇数の哲学薄暑光  
白靴の挙手帆船は外洋へ  
月桃の蔭に逃がれて沖縄忌  
処理水の中で育む目高の子  
理由なき反抗二歳のアロハシャツ

さざなみ 七田 文子

\* 跳ね橋や日傘の母と見たやうな  
梅雨明けの金管の音弾けをり  
大瑠璃の声や山湖のさざなみす  
瑠璃聞いて山路行く歩の軽くなる  
背泳ぎの解き放たるる不安かな



# 沖作品



## 能村研三選

枇杷熟るる二三が六と二四が八  
神奈川 鈴木 基之

\*たてがみを持たぬ男や青嵐  
釣りたての海のにほひの鱒捌く  
かなかなや少し休めと木のベンチ  
八月やアインシュタイン舌を出す  
潮風を受けて紅さす実梅かな  
やはき手の娘の温もりや螢の夜  
暮れなづむ雨の十葉明りかな  
潮焼けの髪を靡かす麦嵐  
青芒阿るものは遠ざくる  
千葉 里村 梨邨

\*青紫蘇の葉脈なぞり雨滴落つ  
緑雨受く記念樹の葉のうすみどり  
市川 澤田 英紀

江戸つ子の啖呵切れ良く男梅雨  
鳴神の闇夜震はす桴捌き  
航跡の色かはりゆく夏至夕べ

身のこなし軽やかにして夏帽子  
千葉 牛島 晃江

\*いけにへの躍り乍らの蟻の列  
蜘蛛の囀の三角点を始めとす  
子蟻螂尾を上げて来て手から手へ  
きじ鳩のくぐもりて啼く朝曇  
夕映えや浜木綿はみな沖を向き  
不器量を生かす工夫も梅仕事  
金光 浩彰

\*箱眼鏡独り漁師の船傾ぐ  
藻の花や日の斑の中に微睡めり  
夕凧や陽の矢一条海穿つ  
空海の書に学ぶ日や雲の峰  
大夕焼ひと日の幸に合掌す  
授かりし米寿のいのち夏祓  
石川 雪江

\*鍋島の色絵風鈴音澄めり  
蜻蛉生るまだ広すぎる空のあり

群雄のごとアーティチョークの夏謳ふ  
千葉 関 妙子

\*片陰の途切れし先を刃物店  
閉ざされし村の入口夏薊  
恋心透かしてゼリー震へけり  
あぢさみの雨無き午後を持て余し  
一望の阿蘇の遠景大田植  
熊本 石橋みどり

エンジンの音唸らせて大田植  
父ありし遠き昭和の田搔馬  
\*暑いとも言はぬ電話の母寂し  
さくさくと草刈あとの匂ひ踏む  
よき色に追はれて高し立葵  
熊本 五十畑悦雄

古代蓮この世の池に水通ふ  
透きとほる海月の呼吸安らけし  
\*陰と翳あり現世の半夏生  
風鈴は南部の音色夜の深し  
熊本 河寄 祐二

\*梅は実に喪の薄れゆく座敷かな  
買ひ言葉納める心地サングラス  
青葉冷小さく父の欠神ご糸  
梅雨闇に鉄平石の径踏みて  
蜜柑咲く腰のラジオの歌謡曲

体耕の畑障取る野罌粟かな  
千葉 鈴木 和江

父と娘の声明美しき青葉風  
\*寡黙なる前進ありきかたつぶり  
水運に栄えし小江戸夏燕  
向日葵の朝日にそむく花のなし  
沢潟や音なき雨のしろじろと  
溝川の音高まるや夏薊  
平嶋 共代

梅雨出水避難指示にて即休診  
白南風や漁師手づくり道具箱  
地階よりベース洩れくる巴里祭  
白無垢の裳裾たいさんぼくの花  
静岡 伊東 弥生

でで虫と照る照るばうず目が合うて  
紫陽花の紅の深さを貫けり  
深き根は根性の水草を引く  
\*蚊遣香終の煙のひとうねり  
手のひらに旅の宝石さくらんぼ  
睡蓮の六花の布石風まかせ  
鳥居 公子

箱釣の息つめ掬ふ水の澱  
\*実梅挽ぐ腕に重き日の斑かな  
看取りみて夏越神楽の胸にしむ

# 飛鷹選評



能村 研三

たてがみを持たぬ男や青嵐

鈴木 基之

ライオンの雄々しさの象徴であるたてがみ。風に靡かせながら大草原を走るライオンの姿は壮麗である。『たてがみを捨てたライオンたち』という小説がある。男らしさの呪縛を描いたものだが、昨今は昔のような雄々しさのある男性像というものが揺らぎつつある。そんな中でも青嵐は容赦なく吹きまくる。現代にあってもたてがみを持つ男の姿に憧れを抱く作者なのである。

青芒阿るものは遠ざくる

里村 梨郎

夏の日盛りの中で、元気に光をたたえて青々と茂っている芒が風になびいている様子は涼しさを呼ぶ。葉の緑は鋭く手を切ることもある。秋に穂が実った芒とは違ったおもむきがある。人間社会に横行する阿たり諂ったりするものを遠ざけるような潔さがある。

青紫蘇の葉脈なぞり雨滴落つ

澤田 英紀

この句は、畑に青紫蘇が実っていて、それが雨に打たれている光景を活写している。作者は最近家庭菜園で野菜を育てているそうだが、店頭に並ぶ青紫蘇を見ているとこのような句は作れない。こうした地道な観察が出来るのも家庭菜園の良いところなのだろう。

いけにへの躍り乍らの蟻の列

牛島 晃江

蟻が列をなして蝶の羽を引いていくのは、まるでヨットの帆のようにも見える。蟻は集団生活をうまくやっていく昆虫であると言われている。その様はいけにえの踊りのようにもみえる。

箱眼鏡独りの漁師の船傾ぐ

金光 浩彰

箱眼鏡で海中を覗き、鮑や海胆などを岩からはがして獲物をとる。船では重さのバランスなどもあるのだ、大抵は漁師が一人で乗ることが多い。獲物を採る瞬間をよく捉えている。

蜻蛉生るまだ広すぎる空のあり

石川 雪江

蜻蛉が羽化するのほとんどが夜明け前で、幼虫は「やご」といわれ、水中に棲む。葦の茎や水辺の草にのぼり羽化して空中に飛び立つときは蜻蛉たちには広すぎるのかも知れない。

片陰の途切れし先を刃物店

関 妙子

作者は片陰が途切れた炎天の中、刃物屋を目指した。刃物屋は店の中でも極めて特殊で、店中が切れ味の良い包丁ばかりが並んでいて、刃に当たる光も眩しい。